

どのように奨学金と向き合ったか ——経緯・研究・活動・課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤島, 和也 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/23980

奨学金と学費を考える

北海道学費と奨学金を考える会インクル

元代表 藤 島 和 也

はじめに

初めまして。藤島和也と言います。私は北海道で奨学金の問題に関する市民活動をしていました。2013年に団体を立ち上げ、2015年まで代表をしていました。同時に北海道大学の大学院生でもあり、2015年まで奨学金をテーマに研究をしていました。

今日はみなさんに、奨学金を考える際に重要なポイントである、大学のコストについての話をさせてもらいたいと思います。

大学のコスト

2013年、法律家や学者を中心とする全国的な市民団体、奨学金問題対策全国会議ができました。この団体の働きによって、奨学金の返済現場の実態が少しずつ明らかになりました。日本の奨学金制度が金融事業化し、返済者の暮らしに大きな負担となっていることが判明し、メディアによって大きく取り上げられることになりました。

いまでは奨学金が学生の将来に大きな負担を残す、というのは当たり前のように（少なくとも、以前ほど拒否感を伴わないものとして）日本社会で受け止められていることになりました。

しかし、ここでひとつ注意が必要ではないかと思います。「奨学金が学生の将来に大きな負担を残す」というと、あたかも彼・彼女らが学生でいる間には、それほど大きな負担がないかのような語感が出てきてしまいます。しかし、果たしてそうなのでしょうか。

結論を先に言うと、学生は大学時代から「目に見えない」負担を負っている現状があるのではないかと思います。

日本の大学の学費は高騰を続けています。国立大学の年間の授業料は53万5800円で、私立大学は年間の授業料は約90万円で、施設管理費などを加えると年間の授業料は100万円を超えるほどになっています。大学生一人当たりの、卒業するまでにかかる教育費用は親世代の時よりも格段に増えています。

授業料だけではありません。大学生が大学を卒業するには生活費も必要になります。自宅から通う学生であればそれほど生活費はかからないかもしれませんが、一人暮らしをすると年間で100万円以上の生活費は必須です。国立・私立／自宅・自宅外の区別ごとに必要な1年間の学生生活費(学費＋生活費)を下に用意しました。

	国立大学 (45万人中)	私立大学 (約197万人中)
自宅	約110万円 (内 学費 65万円) 約14万人	約179万円 (内 学費 138万円) 約124万人
自宅外 (アパート等)	約171万円 (内 学費 65万円) 約28万人	約240万円 (内 学費 138万円) 約61万人

※ 学生生活調査 (2015)、文部科学統計要覧 (平成27年度版) より筆者作成

図1 1年間の学生生活費

ここでは単純化のため、国立大学・自宅(約110万円)と私立大学・自宅外(約240万円)の学生生活費を取り上げます。それぞれを100万円と250万円として考えてみましょう。100万円と250万円を4倍すると、大学4年間で必要な費用が計算されます。それぞれが400万円と1000万円になります。

私自身もそうでしたが、奨学金は家庭に経済的な余裕がない学生が利用する以上、親からの支援が一円も受けられない学生がいます。その場合、大学卒業に必要な400万円なり1000万円なりは、自分で稼ぐか、奨学金を利用するか、あるいは両方を組み合わせるかになります。

年間100万円を時給1000円のアルバイトで稼ぐ場合、年間で1000時間の

アルバイトが必要になります。これは月20日の4時間勤務のアルバイトを一年間続けるのに匹敵する時間になります。年間250万円を稼ぐには、月25日の8時間勤務のアルバイトを一年間続けるのに匹敵する時間が必要です。

私自身は私立大学・自宅外の学生でしたが、できるだけ節約をし、アルバイトで100万円、奨学金で120万円で大学生活の費用を賄っていました。当時のアルバイトの時給は700円台だったため、100万円を稼ぐだけでも大きな負担でした。当時辛かったのは、大学生活を続けるにはアルバイト収入が必要不可欠であって、そのためには半ば強制的に大学生活の時間が削られることでした。同級生と比べて、1年間で1000時間以上も大学生活の時間が削られるのは、学業面でも生活面でも大きなマイナスでした。

奨学金を利用する学生の中には、奨学金を利用するだけでなくアルバイトもすることによって学費や生活費を捻出する学生も少なく無いと思います。あるいは、奨学金の借金を嫌ってアルバイト一本で学費や生活費を捻出する学生もいるはずです。

その際、こうしたアルバイトにかかる時間も、学生であり続けるためには必要な、目に見えないコストであります。奨学金の問題点を考える際は、学生時代にも目を向けて、アルバイトによって学生が大学生活の時間を大幅に犠牲にせざるをえない現状を合わせて考えられれば、より問題の理解が深まるのではないのでしょうか。

おわりに

日本の大学の学費は世界的に見て高い水準にあります。これまではそうした高い学費を親が負担するのが一般的でしたが、貸与型の奨学金制度が90年代に拡充されて以降、これまで親が担ってきた部分の負担を、奨学金によって負担するあり方が浸透しました。奨学金は学生本人の借金になります。奨学金の利用が増えたことを裏返すと、低所得層を中心として、大

学の費用負担は親から学生へと主体が移りつつあることを意味するのかもしれない。学費が高いままで、奨学金が貸与型である限り、こうした傾向は続くのでは無いかと思います。

奨学金制度や大学の高学費を目の前にして、私たちにできることは限られていますが、私は大人が一人でも良いから学生を支援することが必要ではないかと思います。私自身も、多くの人に支えられて大学を卒業できました。私のために大きな出費をしてくれる大人がいてくれたおかげです。

私自身、奨学金の問題を考える団体の活動をすることで、相手を支援するということがほとんどできたとは思えません。大きな課題を残したまま、代表を降りてしまいましたが、今後もみなさんとともにこの問題を考えていきたいと思います。

今日はどうもありがとうございました。